香川県立保健医療大学紀要　第2巻，93-102，2005

母性看護学実習における学生の「自己物語」

関亦 頼子，　植村 裕子[1)]，榮 玲子[1)]，松村 恵子[1)]

*香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科**

"Self-Narrative" by the Students during the Maternal Nursing Training

Yoriko Sekimata, Yuko Uemura[1)],
Reiko Sakae[1)] and Keiko Matsumura[1)],

[1)]Department of Nursing, Faculty of Health Sciences
Kagawa Prefectural College of Health Sciences

Abstract

This study was undertaken to investigate what helps the nursing students establish their identity, using the Tokyo University Egogram Patterns. They were put through the Tokyo University Egogram Test prior to the training.

The pattern which the most students (22.7%) marked was N type, followed by M type (15.9%) and reverse N type (12.5%). Asked to write or "to narrate" what they thought and felt after they knew the result of the test, half of the students gave no "self-narrative". Paying special attention to them, we analyzed some factors which kept them silent.

Key Words: 自己物語 (self-narrative)，沈黙 (silence)，二重性 (duality)，
自己否定・他者肯定 (self-denial・other-affirmation)

*連絡先：〒761-0123 香川県高松市牟礼町原 281-8　香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科　非常勤講師　関亦 頼子
*Correspondence to: Yoriko Sekimata, Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Kagawa Prefectural College of Health Sciences, 281-1 Murecho-hara, Takamatsu, Kagawa 761-0123 Japan

Ⅰ　はじめに

現在，医療分野において近代における科学的実証主義などの反省から人間を解剖学的に見るのではなく，生の意味を持つ存在として見ていこうとする「物語論」への関心が高まっている．まさに，現在の医療のなかで「evidence based medicine (EBM)」から「narrative based medicine (NBM)」への動きが注目されている[1]．

こうした動きのなか，母性看護学実習において看護学生は，大きな戸惑いを見せる．それは，母性看護学の特徴から生じるものとも言えよう．学生は，「分娩見学」として生命の誕生に立ち会う体験が与えられ，新しい生命に触れる．学生が出会う他者は問題を抱える患者ではなく，これから新しい家族の物語を創りだそうとしている母子なのである．また，学生は生命の始まりに触れることで，自らの誕生の時を想起し，自らのルーツを辿っていこうとする．

そうしたなかで，学生は今の「私」が問われていき，「私」は大きく揺さぶられる時を持つ．このような体験は，問題志向的な「ものの見方」をした援助ではなく，むしろ新しく創造していこうとする家族の「物語」を支援していくことであり，学生にとっても自己物語を再生していく機会をもつことになろう．

そこで母性看護学実習では，学生に対して東大式エゴグラム（Tokyo University Egogram: 以下TEG)[2]の心理テストを行って自我状態を把握し，そのことに対する「私の思い」を自由記載することを試みている．　客観的に自我状態を知り，それについて語ることは，新たな自己の発見，および自己物語の見直しにつながっていく．しかしながら，成長・発達段階の途上にある学生にとって直接的な言葉で自己を語り，また「物語」を語り直していくことは容易なことではないものと考えられる．

本論は，TEGにおいて自我状態を把握した学生が自己について如何に語るのか，同時に，「自己物語」を「語る自己」と「語らない自己」という二者の異なる要因が何かを明らかにしていく．それによって，「語らない自己」から「語る自己」へと至る自己の変容のプロセスを追っていくことを目指す．こうした過程が，自己の内面に存在する「隠蔽された自己」の発見となり，新たな自己との対話－「自己内対話の過程」－が自己成長につながっていくものとして，その段階を明確にしていくことを本研究の目的とする．

Ⅱ　研究方法

1．期間

2002年4月～2004年2月

2．対象

2002度および2003年度の短期大学3年生のうち，研究目的と方法を説明し，TEG検査の研究への使用に対し同意を得られた90名．

3．倫理的配慮

TEG検査について自己理解を深める一方法として学生に紹介し，実施した．この際，研究目的と方法を口頭にて説明し，研究の同意を得られた学生に手渡した．データ分析は対象が特定されないように無記名で記入してもらい，全体の傾向性として集計することを約束した．この検査の実施および結果は，実習評価に関係しないことを説明した．

4．用語の定義

「語り」と「物語」の関係とは，語りから物語が生まれ，物語から語りが生じていくというようにお互いに連続的な関係にある．つまり，「物語る」ということは，「ある出来事をその始まりから終わりに至る時間の流れに沿って筋立てつつ意味付けていく行為」[3]である．本研究は，これを「narrative」とする．

5．方法

1）各グループの実習開始前に，TEG自己記入式質問用紙を学生達に配付し，自我状態の判定結果まで学生自らが出し，それを学生自身どのように感じ，思ったのか，自由記載するよう求める．

2）TEGプロフィール・パターンを参考に，妥当性尺度(D尺度:12点以下)と疑問尺度(Q尺度：36点以上）を確認し，CP, NP, A, FC, ACの5尺度の得点（以下，TEG尺度得点）からエゴグラムパターンを作成する．

3）交流分析を構成する基本的構え(「自己肯定・他者肯定」「自己肯定・他者否定」「自己否定・他者肯定」「自己否定・他者否定」）の4種類からエゴグラムパターンと学生が自由記載した－自己物語－との関連性を分析する．

6．分析の視点

「TEG 5尺度の行動パターン」の早見表[2]に

基づいて，表１を作成して分析の視点とする．この四つのタイプは，各優位尺度の特徴となる自他における肯定・否定を示しており，そこで構成されるプラス・マイナスの二面性（代表的なもの）を含んでいる．

表１　TEG５尺度の行動パターン（代表的なもの）

優位型	肯定・否定派	【プラス面】	【マイナス面】
ＣＰ優位	他者否定派	批判精神・義務感・責任感	自分の価値観絶対化・融通性欠如
ＮＰ優位	他者肯定派	共感・受容・奉仕精神豊か	過保護・過干渉相手の自主性損なう
ＦＣ優位	自己肯定派	好奇心・活発・想像力高い	自己中心的・言いたい放題
ＡＣ優位	自己否定派	協調性・従順	おどおどしている・依存心強い

Ⅲ　結　果

回収は，90名（回収率，93.7%）．

調査用紙のうち不適当なＤ尺度，Ｑ尺度に該当するものを除いた88名（有効回答率，91.6%）を対象とした．

１．エゴグラムパターン

学生のエゴグラムパターンの割合は，図１で示すように，Ｎ型（自己否定・他者肯定）は22.7%，Ｍ型（自己肯定・他者肯定）は15.9%，逆Ｎ型（自己肯定・他者否定）は12.5%であり，この上位３つの型は《混合型》である．全体に対して，３つ合わせた《混合型》の割合は，すでに半数を超えている．次が，AC優位型（自分に自信が持てない「自己否定」的タイプ）11.0%，Ａ低位型（現実適応能力が低く，自己実現しにくいタイプ）が7.9%であった．

２．自由記載された「語り」

学生が自由記載した「語り」の結果は，図２に表した．その分類と結果を，エゴグラムパターンに対して自由に語った学生の言葉を紹介しながら，以下にあげていく．

まず，自己の存在を肯定的に語ったものを「自己肯定的」とした．それには，学生の言葉とし

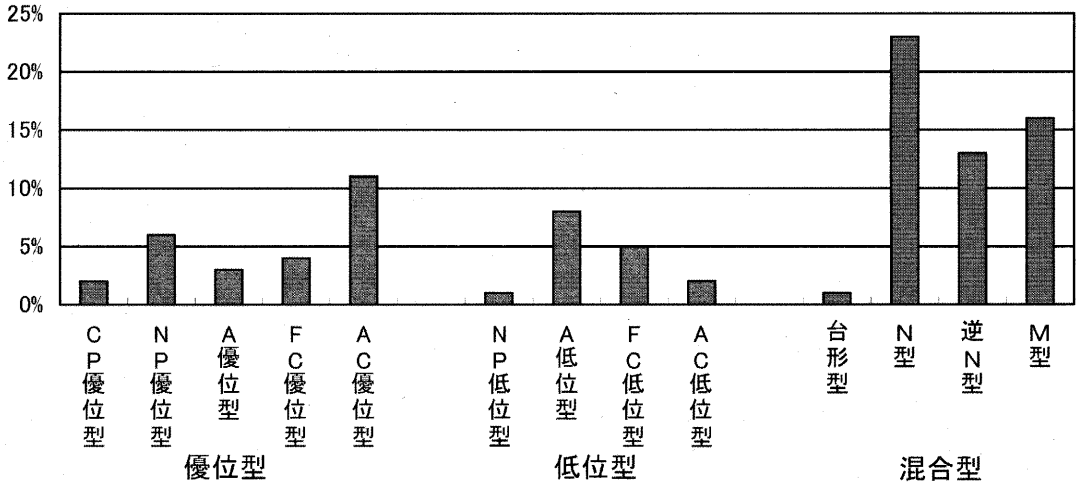

図１　エゴグラムパターン分類の判定　(n=88)

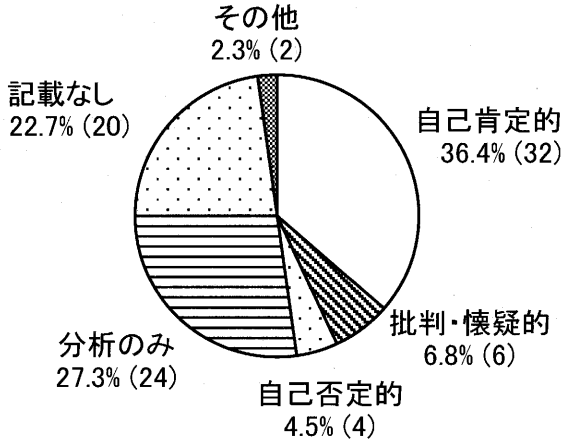

図２　自由記載された「語り」　(n=88)

て（代表的なものとして）「自分自身の性格がよく表れている結果となった．（…省略…）が高いのが目立つ．もう一度自己をよく見つめ直し，欠点は改善する努力をし，良い点はよりのばしていけるように実習中も気をつけていきたい」とあり，それが36.3%であった．

反対に，「自己否定的」とした学生の言葉は，「（…省略…）すぐにオドオドしてしまう．失敗したり，怒られると引きずってしまう…」，「こんな性格では，看護者には向いてないような気がする…」，「結果は良い方にでたが，自分ではあたってないと思う…」など，自分に対して評価が低く，マイナスイメージに捉えているものを否定的なものと分類して4.5%であった．

そのどちらにも入らないものとして，「（結果に対して）あたっていたり，あたってなかったり…」または「自分では，そうは思っていない」などは，「批判的・懐疑的」と分類して，6.8%であった．

どこにも所属しないものとしては，「もっと，よく知りたい」など，直接自己に関しての言葉でないものを「その他」として，2.3%であった．

データ分析の解説の言葉を箇条書きに写しただけのものを「分析のみ」として，27.3%であり，何も書かれてなかったものが「記載なし」で，22.7%であった．この「分析のみ」，「記載なし」の二つを合わせれば，ちょうど50%の数値となる．

Ⅳ　分　析

学生は，最初に自らのエゴグラムパターンを個別的に作成して，次の段階として自由記載した．そのため，エゴグラムパターンの分析を「第一段階」，自由記載された「語り」の分析を「第二段階」として見ていくことにする．また，表1に示した「TEG 5尺度の行動パターン」の四つのタイプとその基盤となるプラス・マイナス面の要素を分析の視点とする．

1．「エゴグラムパターン」から示されたもの

第一段階として，エゴグラムパターンの結果を見ると，N型，逆N型，M型の《混合型》が上位を占めている．混合型の特徴は，5尺度のなかで高い得点が複数に現れ，一つのパターンのなかで、各々の肯定・否定が二重に示されているものである．こうしたパターンは，一つの尺度がストレートに出せない状態であり，「一貫して一つの自我状態」を現しにくいものとしている．しかし，その反応の仕方がその人の特徴，－すなわち，対人関係における心理面と言動に関するものとして－を明瞭化させていくものになると言われている[2]．

この上位三つの混合型を中心に，それぞれの自我状態が所有するプラス・マイナス面における二重性の要素を特に注意しながら，そこから生じる「行動パターン」の矛盾・効果などを検討する．

1）［N型］タイプ：「自己否定・他者肯定」派

このタイプに共通する特徴は，人の依頼，命令に対して「ノーと言えない」，「今ここで何が大切かということは分からず，…無批判に必死にやりとげようとするタイプ」[2]という，CPの低値が反映されている．NPに示される「共感・受容」は，ACにある「協調性・従順」に相応するが，過剰になると「過保護・過干渉」となる．また，自己犠牲を払ってまで他者に尽くすが，同時に「恨みがましい」，「依存心」を持つ．

N型の特徴は，看護学生に対するイメージを反映しているかのように見える．

2）［逆N型］タイプ：「自己肯定・他者否定」派

自己中心型．特徴は「自己主張が強い，積極的」であり，常に「周囲への思いやり，気配りが不足しがち」である．このタイプの「思い込み」は，表面的には「自己肯定・他者否定」であるが，心の根底では「自己否定・他者肯定」であるという[2]．そうした逆説的な行動パターンに現れるのは，CP高値の「理想が高い」のに対してAC低値の「自分を守り過ぎて相手の意見を聞かない」という要素が裏付けされよう．自分への自信のなさが、反対のタイプに現れている．

3）［M型］タイプ：「自己肯定・他者肯定」派

NP高値の他者に対して「面倒見がよい」が，FC高値に示されるように「自己中心性」も高い．「規則遵守・秩序維持能力が低く，協調性に欠けている．思いやりはあるがわがままで行動しやすいタイプ」[2]であるという．

一見，自他ともに肯定タイプであるために安定性があるかのように見えるが，このタイプは友人が多い反面，長続きする対人関係は持ちにくいとされている。こうした言動も，

Aの持つ現実処理能力が影響されているが，低い場合は感情そのままの行動が多く，本人自身もその衝動に振りまわされて，どうしてよいかわからなくなってしまう場合が多いという．やはり，各尺度の高低値が大きな影響力を与えるようだ．

以上の《混合型》は，「十分大人になりきれていない子どもの状態」[2]と特徴づけられ，自我状態も未だ不安定といえる．

これらのことから学生の行動パターンは，プラス・マイナス面の二重性の要素を持ち，自己および他者ともに十分に肯定された状態ではなく，適応されているとは言い難い．そのため，自他共にアンバランスな状態であり，青年期の課題「アイデンティティの確立」も未達成であることが推測される．

2．自由記載された「語り」から

第二段階として，自由記載の「語り」のうち，「自己物語」として語る学生と語らない学生に大きく別れた．その特徴を三つの点から示す．

1）「自己肯定的語り」

エゴグラムパターンからの関連性として，特徴的な種類を示すものはなかった．

学生の言葉，「その通り」，「あたっている」というように，各々のパターン分類の自我状態に対して肯定的に受け入れている．また，「頑張りたい」など，意欲的に実習に臨んでいこうとする言葉もあった．肯定的な語りは，時間的な経過の中で自己を捉えられており，過去を振り返りながら今後こうしていきたいなど，未来の自分に対しても語られているのが特徴的であった．

2）「自己否定的語り」

エゴグラムパターンでは，比較的「CP」，「AC」の優位型傾向にある．

この型の特徴は，「自己否定・他者否定」を示し，「語り」においては自己言及が多いことが目立った．そのなかでも「看護者に向いていない」という言葉は，現在の自分，またこれからの役割に対しても不適応を感じていた．

しかし，自己言及が多いということは自己について多くのことを語ろうとし，自己弁明しているようにも見られた．このことは，「AC」に表される「いい子」であろうという特徴が窺える．

3）「自己を語らない」

この分類では，「分析のみ」（解説だけの記入）と「記載なし」の両方を合わせて，自己について語っていないものとした．50%という半数の学生が，この分類に属する．

「分析のみ」書いて自己についての語りがないものは，学生のエゴグラムパターンの傾向がAC優位型で，その特徴が「自己否定的依存タイプ」であることも納得される．

また，記載することを条件付けながらも何も書かなかった「記載なし」に属する学生のエゴグラムパターンの傾向は，CP低位型である．この型の特徴が「自己責任・秩序維持能力が低いタイプ」で，関連性があるように窺える．

ここでは，両者ともに自己の「物語」性を見いだすことはできない．「語らない」行為に対して，その行為を学生の表現とみた場合，その行為は「沈黙」といえよう．

エゴグラムパターンから，プラス・マイナス面という対極的な二重性の要素が潜在する自我の行動パターンでは，自己および他者の関係において肯定・否定という二つの特徴が同時に所有する《混合型》が，学生の半数以上占めることがわかった．また，自由記載の「語り」からは，書く行為を通して「自己物語」を見いだそうとした肯定的な語り，否定的な語りをする学生もいたが，半数の学生は自己の「物語」を語らなかった．

3．「自己物語」を創造していく為に

交流分析における自他の肯定・否定を関連させて分析してみると，第一段階では，《混合型》のエゴグラムパターンから表面的な自己と内面的な自己の相違が見いだされ，まだ自己の確立がなされていないことが窺われた．そして，第二段階では自己を肯定的，または否定的に語る他に，「語らない」学生が半数にも及んでいた．これらのことから，「自己物語」を語ること，また語らないことは，自我に潜在する二重性の要素や自他との関係性において如何に影響されるのであろうか．

この問いから「自己物語」を創造していくことを中心課題として，「語らない」自己に焦点にあてて考察していく．まず，自我の中に潜む二重性の要素について，そして，「表面的自己と内面的自己の相違」性と自己の確立との関係

をF. ボルノーの「役割論」[6]から考えていく．また，隠された内面性を探求するために，自己のルーツを辿り，自己物語の起源となる自己の「誕生」を想起していくことが，有効な手段となろう．次に，物語を「書く」ことの意味を見いだすために，過去に書かれた「自己物語」として「自伝」を手がかりとする．そのことによって，自己を物語ることの重要性と必然性が見いだされていくと考える．

これらの過程を通して「語らない自己」から「語る自己」への変容を明らかにし，「自己物語」を語ることが「アイデンティティの確立」を促していくための要因となることを明確にしていきたい．

V 考 察

1．私の中の「二重性」

「私というものはどのような存在か」，「本当の私とは」，青年期の発達課題でもある「アイデンティティ」を求め「自分探し」をする時，「自分」あるいは「私」という現象がどのように成り立っているのだろうか．人生のなかで自己に対して，また他者に対して語っていかなければならない時がある．「私」というものは，いつから存在するようになったのか．いつ，「私」という存在に気がついたのか．発達段階で言えば，幼児期に「自我」の目覚めがあったとき「自分」の世界を持つようになる．そして，いつしか自分のことを呼ばれていた名前ではなく，「私」と呼ぶようになる．他者の存在に気づいた時，世界が枠付けされてその中心に「自己」が位置づくのである．「自分がどのように産み出され，維持され，ときに変容していくのか」と自分の生を語りだした時，「自己物語」が創造されるのである．「自己物語」－すなわち，自己が語る物語－とは，「個人が自分にとって有意味な事象の関係を時間軸にそって説明 account すること」であるという[5]．そして，この「自己物語」とは，本質的に他者に向けられ，他者に納得されるものでなければならない．それと同時に，「自己物語は物語り得ないものを前提にし，かつそれを隠蔽するものである」という[5]．それでは，「語り得ない」ものとは何か．まず，ここでは「語り得ない」状態にさせている要因を探っていくことにする．

「5尺度の行動パターン」で見いだされた「プラス・マイナス」面の二つの要素は，自我の中で矛盾を孕む二重性の要素であり，「私」というものを構成する要素でもある．つまり，自我のなかでこの二つの要素が混沌と存在する時，その性質と働きによって「私の行動」は二重性を持ちながら現れていくのである．そうした二重性の要素が働く「私の行動」は，「齟齬と矛盾」を持ち合わせた「私の出来事」となっていく．例えば，看護学生に多いとされる「協調性に富む」というものは「依存心が強い」，「ノーといえない」ともいえる．そんな光景は，特に実習のグループ間でもよく遭遇されることである．そんな出来事を物語として語る時，自分の行動を説明できないときがある．学生の行動を振り返り，何故そうしたのか尋ねても「よく，わかりません」という言葉が返ってくる．自分の行動が，説明し難いものとして言葉に置き換えていくことができないのである．自己のなかで何かくい違いが生じ，矛盾があればその出来事は腑に落ちない「私」にも納得のいかない物語となるのである．一貫性のない「物語」は，もはや「私」の「語り得ない」物語となっていく．こうして，「語り得ない」物語に対して，「語る私」はもはや沈黙を守るしかない．

「語りえないことについては，沈黙しなければならない」．

『論理哲学論考』で語られたヴィトゲンシュタインのこの言葉は，歴史という「大きな物語」の中で統一された「共同体」を支えていくために語られたものであった[4]．歴史という「大きな物語」に対して「私の生の物語」として「小さな物語」となる時，「私の自己物語」もまた統一されていなければならないのである．「大きな物語」と同様に「小さな物語」，つまり「自己物語」もまた一貫性がなければならない．しかしながら，事実と照合した物語が一貫性にそぐわない場合，そこに生じた非一貫性は，物語の中の「齟齬と矛盾」となり「語り得ない」ものになる．その時，語り手としての「私」は沈黙を守る存在となるのである。

2．「自己肯定・他者否定」，実は「自己否定・他者肯定」派

次に，「表面的自己と内面的自己の相違」性と自己の確立との関係について考えていく．

「ノーと言えない」，「無批判」，「従順」これらは，看護学生のタイプに多い「自己否定・他者肯定」派であるが，これは裏を返せば「依存心が強い」，「過干渉」，「過保護」タイプになる．「自己否定」という自分に対する評価の低さが，他者に対して依存性を高める傾向をもつ．このように自己が確立されていないと，代わりに自己以外他のものに置き換えていく．

では，反対に「自己肯定・他者否定」の場合はどうであろうか．この場合も同様に，他者を受容できない自己肯定派は「自己愛」は強いが，自分に自信がないために他者の存在を恐れて受け入れることができない．こうした否定性は，その根底に「自己否定・他者肯定」を潜在させたものであるという[2]．つまり，自己の中に隠れたもう一人の自己ー隠蔽された自己ーを持っていることになる．

このことを，子どもの成長概念を唱えるF.ボルノーの言葉から考えていきたい．ボルノーは，自分が何者であるのか明確にされていない時，人はその役割の中に逃げ込む傾向をもつという[6]．すなわち，人間が社会的存在として生きることが強要されていく時，他者から「役割」を持った人間と見られていく．しかし，自己が確立されていない人間は，その「役割」のなかに自己を埋没させてしまうのである．ボルノーは，そうした人間に対して「その役割を演じてながら，自分はそれを演じているだけであるという意識」を持つものであり，「人間は，仮面のうしろに隠れるのと同様に，自分の役割の背後に隠れることができる」[6]ものとみなす．

自己否定または他者否定に陥った学生が，仮面のかげに自己を隠蔽させている時がまさにこの時といえよう．自己の否定性は，本当の自分ではなく他者から求められている役割に没頭する．また，他者に対する否定性は，自分を隠して役割を義務化していく．どちらの否定性も，本当の自己を隠蔽させて仮面をつけた自己を現す．本当の自己は，未だ自分が何者であるのか確立されていないために内面に隠されたままなのである．

ボルノーは「人間は本気になったとき自分の役割を突破して外に出て行き，そして無保護のままに，誤解されたり利用されたりする危険を冒してでも，他人に心を開くことを学ぶということが決定的に重要」という[6]．

例え，自己の中に「齟齬や矛盾」があっても恐れずに内面を現していくこと，そして，他者を受容して生きていくことが何よりも大切であるとする．すなわち，人間は表面的な役割だけで生きられるのではない．何よりも，内面に存在する隠された自己を見いだすこと，そのことによって表面的な役割を持つ自己から解放され，真に自由な人間になれるという．そのために，他者の存在を受容していくことが重要であるとする．自己の確立のために，他者の存在は必要なことといえよう．このことから，「他者の存在」をキーワードにしながら「自己物語」を「書く」ことについて考察していく．

3．「自己物語」を書くこと

自由記載された「語り」は，「物語る」ことを「書く」という視点で考えていく必要があろう．

物語を「書く」という行為は，その対象を自己以外の存在に開かせていくことになる．つまり，そこでは「他者の存在」が位置付き，書かれたものは自分の目だけでなく，他者の目にも触れさせることになる．その際，書かれた物語は「他者の納得いくもの」として対応し得るものでなければならない．

この「納得される物語」は，「私の語り得ない」物語を隠蔽させることによって他者に受け取られるのである．人は「物語」を書く時，他者に受け取られるよう「納得される物語」を書く．しかし，もし「語り得ない」自己を隠しきれなかった場合，書く作業を止めてしまう．書く行為は，「語る私」を沈黙させ，物語のなかの「私」は「隠蔽された自己」となるのである．「自己物語」を書くことは，このような困難さを持つことなのである．

しかしながら，その反面，近代以降は多くの人が自分の生について「自伝」また「自分史」という形にして語るようになる．前近代では，自己は共同体の中に埋め込まれ，あえて自己を語りだす必要性もなかった．そうした共同体が解体し，近代の市民社会へと変質した時，個人は尊厳を持った存在となり，個々の自己に聖なる物語が必要とされる時代となった．そんな時代のなかで，私たちは「自分とは何者か」と語らずにはいられない「自由」を運命づけられて生きているという[7]．また，近代小説は「如何に生きるべきか」と問う近代的自己の出現によって確立されていく．

このように，歴史的流れの中で個人の誕生と自己の発見は，自伝や小説でいう文学と密接な関係にあった．歴史のなかで私という「小さな物語」を位置づけ，他者との関係性の中で生きる「私」は，自己を語る必要に迫われた際，様々な自己を表現する物語のモデルを求める．そんななか，近代の自伝・伝記作家らは，物語を語るプロトタイプを供給し語られるべき自己の内面の深さや奥行きを表現してきたのである．こうして，「書く」という技法は文体やレトリックという次元を提供し，一筋縄には語れなかった私の隠蔽された部分を語ることを可能にした．物語のなかの「齟齬と矛盾」は絡み合った糸をほどくように解き明かされていくのである．

自らについて「書く」という困難が目前に迫った時，より文学に親しんでいくこと，書く技法を習得していくこと，これらのことが，学生にとって「自己物語」を語り得るために，自己という概念を言葉に置き換えていくための大きな助けとなるであろう．

4．「語り得ない物語」から「語る物語」へ

「語らない私」は，他者の存在を通して「語り得ないもの」を発見し，「私」も他者も納得する物語に語り直していく作業へと導かれる．

そうした「語り得ないもの」の一つに，「誕生物語」があげられる．特に，学生は実習の中で新しい生命の誕生に触れ，自らの誕生を想起する機会を持つ．しかしながら，誰も自分の誕生がどのような状況で生まれたかを自分の記憶だけで語ることはできない．自己の最初の出来事（誕生）は，他者が語り，他者から聞いた物語なのである．その多くが母親であり，家族であろう．自分の生まれた様子を他者から聞くことによって，初めて自分の誕生物語を知ることになる．何よりも自己物語は，その起点を他者の語りを聞くことから始めていくのである．自己物語，あるいは「私」の歴史は，「記憶において始まるのではなく，他者からわれわれに向けて語られる物語において始まる」のである[5]．

「私」の知らなかった過去の出来事は，他者の存在によって一貫性をもった「誕生物語」として創造されていく．人生の始まりから幼児期・学童期に至る各発達段階に至る「私」の歴史，「自己物語」の創造は，「私」だけの物語ではなく，他者の物語もまた必要とされているのではないだろうか．個としての物語が創造される時，過去の出来事はさまざまなエピソードになって私の経験に浸透され，そこに私と関係した他者の物語もあれば，家族の物語，学校の物語なども重なりあう．そうした重なりあいが，「私」の物語の中で「齟齬と矛盾」であった．しかしながら，他者の物語を取り入れることによって「私」の物語は語り直され，「私」も他者にとっても一貫性を持ち，筋道のある物語へと語りだされていくのである．

人間の関係性の中で生きる「私」の物語は，他者からも自己からも納得された「自己物語」でなければならないのである．このように，他者と関係しながら創造されていく自己物語は，「自己の物語でありながら他者の物語を引き受けながら成立している」[5]のである．

5．「物語る自己」としての存在へ

「自己物語」を語り直していく作業は，他者を受容して穏蔽していた自己を見い出し，他者の物語の力を借りながら「自己物語」を再生していくことになる．それまで，自己との関係が他者に向けられていたのが，この自己発見によって新たな自己との関係を創造していくことになる．

この「新たな自己との関係」について考えていく場合，改めて「自己」を見直していく必要性があろう．自己の特徴をあげれば「自己」，[self] とは，再帰代名詞で主語 [subject] にも目的語 [object] にもなる．この見方を前提として，浅野[5]は自己を「主我‘I’」と「客我‘me’」の二つの側面に分けて，「客我」が自分の行為を内側から見つめ，評価する「内なる他者」とする時，「主我」とはその客我に反応する行為の担い手とする．このため，二つの側面を持つ自己は「主我と客我との間の相互作用」であり「対話」であると述べる．

ここで，明確にしておくことは自己は二人の「私‘I’」を持つということである．そこで，分析の第二段階で表した自由記載された「語り」について考えていくと，「語る私」はようやく語るべき対象を見いだした存在といえる．「自己物語」を語る「私」は他者に語ると同時に，「客我」としての「私」－すなわち，内なる他者－に語っているのである．そのなかで，比較的否定派が自己について多くを語っているということは何を意味するのか．

「語る私」がようやく語るべき自己を見いだした時，自己を受容していく手続きとして「私」は弁証法的に一度自己を否定していく．その否定は，語られる自己の確認をとっている段階といえよう．そこで，語られている言葉は，他者に向けられたものというよりも，むしろ自己に向けられたものといえよう．

「新たな自己の発見」は，自己の内面に「内なる他者」を存在させていくことによって主我と客我の位置付けを確立させていく．外的な「私」（主我）と内的な「私」（客我）が対等に位置付き，語り合うことができる．こうした段階を通して自己の確立－すなわち，アイデンティティの確立－が導かれていくと言えよう．そして，「自己物語」は自己が自己を語るという，自己の内面において二人の「私」が対話し合う－「自己内対話の過程」－によって，自己成長をも導いていくものとなろう．

Ⅵ　おわりに

「私とは何者なのか」，「本当の私とは」，考察のはじめにあげたこの問いは，アイデンティティの確立を目指す青年期の学生にとって自己概念を明確にし，自己理解していくための欠かせない問いである．この問いに対して「自己が自己を語り得る」という自己物語を通して一貫した答えを出そうとする際，「語り得ない自己」を見いだすことになる．つまり，自己のなかに「齟齬と矛盾」を含んだ自らも納得し得ない，隠蔽された「語り得ない物語」を持っているのである．

TEGテストでは，隠された自我状態を視覚的に明らかにしていくことができる．また，エゴグラムパターンに現された自我状態を語っていくことは，自己を客観的に評価できる一つの手がかりにもなる．TEGテストの結果，多くの学生の自我状態は《混合型》であり，自己の内面に「語り得ないもの」を持ちながら，沈黙を守り実習に臨んでいることが明らかになった．

しかしながら，実習に臨んだ学生は新しい生命に触れ，新しい家族が創造されていく場面に直接的に出会う．こうした体験が，学生にとって自らの生を振り返り，「私の物語」を語りだしていく力と機会を持つことになる．自己のなかの「語り得ないもの」との出会いが，母性看護学実習の場にあるといえよう．

そのなかで，特に重要となるのが「他者の存在」である．学生の新しい生命と新しい家族との出会い，そして，自己の生の振り返りは自己の物語と他者の物語を互いに共有するものとなる．他者の物語を自己物語に取り入れながら「私」という「小さな物語」を語り直していくのである．また，分娩見学した学生は，書く作業を通してその体験を言葉に現わし，「物語」を創造する準備をしていく．

「自己物語」の創造は，学生の様々な実習体験を通して他者の物語も創造させていく力を持つ．母親の身体を通して，また新しい生命の感触に触れて，他者の物語を感じ，また，新しい物語を創造させていく援助をする．そして，「カンファレンス」は，学生にとって自己を生成させていく時を持つ．実習前に語れなかった学生は，実習を通して経験した自己を見つめ直し，「カンファレンス」という場で語る機会を持つ．そこで必要とされる他者は，常に一貫して「聞く」存在でなければならない．その存在は，「語る私」に対して内的自己を映し出す鏡ともいえよう．映し出された「私」の存在を「私」が確認していくことによって，内的自己は確実に位置づけされていくのである．こうして，「私」はもう一人の「私」と内的対話－「自己内対話の過程」－を通して「自己物語」を語る存在となり得る．

新たな自己の確立は，アイデンティティの確立を目指していくものであり，対等に語り合える自己を内的に持つことで，「私」はもう一人の「私」の導き手によって自己成長していくのである．

謝　辞

本研究を進めるにあたり，今回の調査対象として協力していただいた短期大学の学生の皆さんに感謝致します．

文　献

1）Trisha Greenhallgh, BrianHurwitz, (1998)“Narrative Based Medicine, Dialogue and discourse in clinical practice”, BMJ.
［斎藤清二，山本和利，岸本寛史訳（2001）“ナラティブ・ベイスト・メディスン－臨床における物語りと対話－”，金剛出版，東京，p1－28.］

2）東大医学部心療内科（1995）“新版エゴグラム・パター

ン－TEG（東大式エゴグラム）第２版による性格分析－”，金子書房，東京，p15－130.
3）矢野智司・鳶野克己（2003）“物語の臨界－「物語ること」の教育学－”，世織書房，神奈川，p3－25
4）野家啓一（1996）“物語の哲学　－柳田國男と歴史の発見－”，岩波書店，東京，p91.
5）浅野智彦（2001）“自己への物語的接近　－家族療法から社会学へ－”，勁草書房，　東京，p1－180.
6）Otto Friedrich Bollnow（1977）“Freiheit von der Rolle”, Lizenzausgabe mit freundlicher Gruyter und Co.,Berlin, p1－26.
7）矢野智司（2003）生成する自己はどのように物語るのか　－自伝の教育人間学序説－，“人生を物語る－生成のライフストーリー－”（やまだようこ編），ミネルヴァ書房，京都，　p251－281.

受付日　2005年10月31日